

協同体が「協同体」であり続けるために何が必要か？
——大学生協の「歴史の天使」——

鬼頭孝佳（名古屋大学文学研究科博士後期課程）

宇宙や電脳世界を除いて、大規模な「フロンティア」が望めず、利子率が長期に渡り低迷する今日、主流派経済学者ですら、「資本主義の危機」を唱えて久しい。古くは、こうした危機の「オルタナティブ」または「来るべきアソシエーション」として、「協同組合」が持て囃された。例えば、大学生協は「魅力ある事業として組合員の参加を活発にし、協同体験を広めて人と地球にやさしい持続可能な社会を実現する」という「大義」を今も「掲げて」はいる。しかし、この大学生協の「理念」は大学生協の「起源」と現在置かれた「社会的諸関係の総体」の中に位置付け直さなければ、「井の中の蛙、大海を知らず」ということになりかねない。

そのために、まずベンヤミンの『歴史哲学テーゼ』の「歴史の天使」に倣って、専従職員からは「敬して遠ざく」形で打ち捨てられ、顧みられない瓦礫から、生協創始者たちの「夢」を「救済」し、生協が生協であるための必要最小限の条件を鮮明にせねばならない。その創始者の1人として、賀川豊彦を取り上げる。というのも、賀川の取り組んだ社会運動はキリスト教に支えられたものであり、理念は「神の国」を求める生きた実践として結実しているからである。その理念の意義は、①信仰をエクレスシア（神の家）の生活＝経済実践に求める姿勢、②物神（偶像）崇拜の否定、③「主観経済」概念に表された情念の変革に整理できる。このうち、「主観経済」概念が単なる主観的観念論ではないことを確認するために、スピノザのコナトゥス概念を援用して、資本主義の欲動を論じたロルドンの思想を経由し、賀川が生協に期待した社会変革の役割を明らかにする。

この賀川の「夢」を「温故」・「不易」の基軸として、今の大学生協が果たして、アソシエーションの「旗手」足り得ているのか、現状分析を踏まえつつ、再考する。そもそも、協同体（ゲノッセンシャフト）はゲゼルシャフト的な組織にゲマインシャフト的な「夢」を託した疑似共同体として在る。大学生協の場合、理想理念としては、大学構成員の自発的な結社に於いて、自らの手で共同の福利厚生「活動」を担う。ここでは、専従職員はあくまでも構成員の代理人にすぎない。しかし、ヘーゲルを再解釈したコジェーヴの「主人と奴隷の弁証法」を持ち出すまでもなく、現在の大学生協で組合員による合議は「形骸」化し、実質的な決定権は、（一部の）専従職員の手に入り、「事業」が主眼になってしまっている。我々はそのことを例えば、総代会招集の在り方、店舗運営の方法、人事制度の在り方、単協と事業連合の立場の逆転、市民と株式会社のメタファーの濫用に確認することが出来る。すなわち、組織の形式は「協同組合」であっても、実質的な活動は「株式会社」と変わらず、組合員は「物言う株主」ほどの発言権も無い。寧ろ、経営危機を口実に「株式会社」化した大学生協は「業者」とは異なる「独自」の存立基盤を毀損し、「協同組合」という名称がその活動を糊塗するイデオロギーとして機能していると見て大過ない。